八重山の暮らしと伝承～星・月・風～

宮城幸子

はじめに

会場の皆さまこんにちは。沖縄から参りました宮城と申します。この度は、お招き頂きまして有難うございます。私は、研究者ではありませんので、学問的な見地からではなく、六十余年に体験したり、耳にしたりしたふるさと八重山のことをお話しさせて頂きたいと存じます。ただ、長いこと小学校で教鞭をとっておりましたので、話がやや稚拙で、しかも、個人的な体験なのでプライベートな内容、超ローカルなものになることをお許しください。

では、「八重山の暮らしと伝承星・月・風」というテーマでお話させていただきます。

まず、石垣島の位置ですが、図のように琉球弧の端っこにあるのが八重山諸島で、その中心にあるのが石垣島です。人の住む島としては最南端に「波照間島」があることと、近くに台湾があることをご承知おきください。

さて、これからお話する石垣島ですが、ちょうど北緯二十四度に位置します。北緯24度にあるおかげで、南の島ならではの様々な特色が見られます。

まず、八十八ある星座の内八十四の星座が見られ、二十一個の一等星がすべて観察できます。南の空が良く見えるのは当然ですが、本土に比べて十度以上南の空が開けていて、太陽の高度が高いので（夏至の南中高度が八十九度）、必然的に惑星の高度も高く、観察しやすいということになります。さらには、夏の晴天率が高いと言われています。勿論、台風が来なければの話ですが―。

「星の降る町」をキャッチフレーズにする石垣市では、旧暦の七月七日頃、「南の島の星まつり」というイベントが開かれます。さらに、石垣島には二〇〇五年に石垣島天文台ができました。その中に沖縄最大の「スバル望遠鏡」があり、口径が

一〇五センチメートルと大きいので、固定して、天窓が開くようになっています。そこでは毎週土日に観光客や島の人たちを対象に観望会が開かれています。また、地元の高校生や琉球大学と提携して観測会を行い、何と、地元の高校生が何度か新星を発見しています。

さらに同じころ、石垣島に電波望遠鏡ベラが設置されました。岩手・小笠原・鹿児島・石垣の四地点で銀河系を観測しているわけですが、それは、口径二三〇〇キロメートルの大望遠鏡に匹敵し、天の川の立体地図を作成しているとのことです。

石垣島の天体に関する特色を縷々述べてきましたが、最も誇れることは、「星の文化がある」ということです。

Ⅰ　八重山の星々

1　「北緯二十四度の石垣島」と「スバル」

北緯二十四度の石垣島では、スバルが天頂を通ります（スバルの赤緯が24度）。空の一番高いところを通るので、ほぼ一年中空のどこかで見えているということになります。

スバルは、とても小さな星の集まりで、宝石箱をひっくり返したような美しい星の集まりです。また、青白い色をしていることから、生まれて間もない若い星の集まりだということがお分かりいただけると思います。スバルは五～八千万年前に生まれたと言われていますので、私たちの太陽が5億歳であることを考えるとはるかに若い星といえます。

でも、スバルというのは星座の名前ではありません。おうし座という星座の肩の部分にある星団でプレアデス星団とも呼ばれています。

スバルは小さい星ながら、可愛らしい星の集まりなので人目を惹いたようで、清少納言の「枕草子」にも「星は昴、ひこぼし、ゆふづづ・・・」と、一番先に登場します。

八重山の先人たちも、この可愛らしく、美しい星を見逃さなかったようです。

2　八重山の古謡「ムリカ星ユンタ」

♪天の群り星や数みば数まりしが　親ぬ言し事や数みやならぬ

（天の星は数えようと思えば数えることができる、親の教えは数えることができない）

と、沖縄の教訓歌「てぃんさぐぬ花」で歌われている「群り星」とは、数えることのできないほどたくさんの星、という意味で解釈されることが多いが、琉球の神歌「おもろさうし」には、「ゑけ　あがるぼれぼしや　ゑけ　神がさしくせ」（上がる群り星すなわちスバルは、神の花櫛のようだ）と詠われています。八重山でも「群り星」はずばり、「スバル」のことを指し、「ムリカ星」とか「群る星」とか呼ばれています。

八重山地方には、このスバルのことをうたった古謡「ムリカ星ユンタ」があります。原歌は何度か目にする機会あったかと思いますので、ここでは、伊波南哲という八重山の詩人が、子供たちのために標準語に訳したものを紹介します。

♪南七つ星にヨー　天の神様が
島へ行けよと仰せられ　国へ行けよと言われたぞ
私は島へ行かぬ　私は国へ行かぬ
いやだと答えたそのために　行かぬと答えたそのために
南の方に押し飛ばし　未の方にけり落とし
（南の空で）
巻き踊りしているそうな　結踊(ゆいおどり)りしているそうな

♪（北七つ星にも同様・・・・・）

♪ムリカ星星にヨー　天の神様が
島へ行けよと仰せられ　国へ行けよと言われたぞ
私は島へ行きまする　私は国へ行きまする
ハイと答えたそのために　行くぞと答えたそのために
八重山島の真上から　光り輝き照りまさり
物作りゆしうらば
ムリカ星を目当てにし　スバル星を目当てにし

南七つ星は、いくつかの説がありますが、現在では「南斗六星」が有力な説となっています。北七つ星は、言わずと知れた「北斗七星」で、ムリカ星は先ほどから触れている「スバル」です。ムリカ星は、神様の言うことを聞いて島を治めに行ったので、天頂高く掲げられ、島の人たちは、ムリカ星を頼りにするようになった、目当てにするようになったというわけです。

星図座でいて座は、上半身は人間で下半身は馬という怪人ケーロンが弓をつがえてサソリの心臓を狙っている姿が描かれていますが、その腕から弓にかけて、北斗七星を模した小さなひしゃくが伏せられた形が見えます。それが南斗六星です。北斗七星に対して南斗、そして六つの星でかたどられているので「南斗六星」と呼ばれています。

余談になりますが、教員になって星に興味を持ちいろいろ調べていくうちに、中学時代の学芸会で「ムリカ星」の踊りを踊ったことを思い出しました。白い服に身を包み、頭に星の冠を載せて、確か、私は北七つ星の役だったように記憶しています。

踊りの最後に野良着姿の女の子たちが数名出てきて

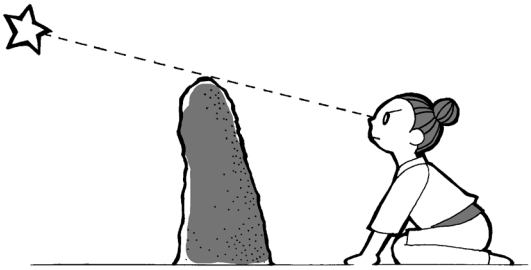
♬サアサ、精出せ力出せ　空は晴れたぞ　胸は勇みたつ
大中（大浜中学校）乙女も踊り出す　サアサ　踊り出す・・・

という、歌に合わせて輪になって踊っていたのは、神の仰せに従わなかった南七つ星や北七つ星が、丑や未の方に蹴り落とされて巻き踊りを踊っている様なのだということを後になって理解することができました。スバルも、古謡も知らない中学時代にこの歌や踊りに出会っていたことに、不思議な縁を感じたものです。

3　農耕の手がかり「星見石」

スバルは歌に歌われただけでなく、人々の生活とも深く結びついていました。

一六七〇～八〇年頃、八重山地方では各島々、各村々に「星見石」というものが建てられたということです。「星見石」には、一五〇cmくらいの琉球石灰岩を棒状に立てたものや、石臼型のものが用いられたようです。使用方法としては、図のように一定の距離を置いて人が座り、目・石・星が一直線に並んだ時「＊＊の種を蒔く時期だ」というように活用していたようです。観測者が観測していた星、それがスバルなのです。石臼型のものは周りに方位が刻まれていて、中央の穴に竹や櫂を立てて使用したようです。



では、なぜ八重山地方に星見石がこれほど広まったのでしょうか。当時、宮古地方と八重山地方には、人頭税という重い税が課せられていました。

それで、為政者や役人は、穀物の生産高を高めるために穀物の播種の時期や収穫の時期を正確に判断する必要があったことは容易に推察できます。

人頭税との関わりで「星の文化」が生まれたことは少し皮肉な感じがいたしますが、先人たちの知恵には驚かされます。

4　イールユドゥン・アールユドゥン

さて、歌に詠まれ、農耕の手がかりとしてのスバルについて紹介してまいりましたが、スバルの活躍はまだあります。それが「イールユドゥン・アールユドゥン」です。

全く聞きなれない言葉が出てきましたが、「イール」というのは「西」とか、「入る」とかの意で、「アール」とは「東」とか、「上がる」とかの意があります。

私の母は五年前に九十二歳で亡くなりましたが、亡くなる数年前からずっと母から聞かされ続けたのが、「イールユドゥン、アールユドゥン」という、自身の父親（私から見れば母方の祖父）から教わったというこの言葉です。

「四月（旧暦）の八日あたりからイールユドゥン」「五月（旧暦）の八日あたりからアールユドゥン」「＊＊という星が見えなくなるから、ユドゥンの節に入る」というわけで、何という星なのかは分からないとのことでした。初めてこの話を聞いた時、毛が立つほど感動しました。それは、スバルの動きと梅雨時を上手く言い当てていたからです。

「ユドゥン」とは「淀(よど)む・休む」ことを意味し、他方、八重山地方では「梅雨」のことをも「ユドゥン」と称するのです。隠れて見えなくなる星というのは「スバル」のことで、天頂を通るスバルは、五月から六月の間の一か月間ほど、空から姿を消してしまい、見えなくなります。その時期は、八重山地方の梅雨の時期とぴったり合っているのです。

気象台の記録によると、八重山地方の平年の梅雨期間は、五月十日頃から六月二十日頃と言われていて、スバルが淀む、すなわち見えなくなる時期とほぼ合致します。

このように、星の出没と梅雨期を結び付けた言葉は全国的に見ても珍しいと言えるのではないでしょうか。先人たちの観察力と知恵に感嘆させられます。

5　子(に)ぬ方星(ふぁぶし)（北極星）と　七つ星（北斗七星）

♪夜走(ゆるは)らす舟(ふに)や　子(に)ぬ方星(ふぁぶし)見当てぃ　我(わ)ん生(な)ちぇる親(うや)や　我(わ)んどぅ見当(みあ)てぃ♪

（夜、海を行く舟は北極星を目印にしている、私を生んでくれた親は私を頼りにしている）

と、沖縄のわらべ歌「てぃんさぐぬ花」にも歌われているように、北極星は今も昔も、そして、国内外を問わず、方角を知る手がかりとして用いられてきたようです。

それは、地軸の延長線上にあり、地球の自転軸の真上にあるので、空の一点に止まっているようにみえ、一晩中、一年中、いや、五〇〇〇年ほど前から動いていないように見えるのです。これほど大事な星なのに、残念ながら二等星と、あまり明

るくないので見つけづらいのです。そのような時は、北斗七星やカシオペア座を手がかりに探すことができますが、その方法についてはここでは割愛いたします。

ご存知のように、北極星の高さは、その土地の緯度とほぼ同じ高さに見えます。昨年、北海道の最北端の利尻島に行った時、北極星の高さにびっくりし、さそり座のしっぽが山にひっかかる状況にさらびっくりしました。

次の写真は、北緯四十五度の利尻島と北緯二十四度の石垣島の北極星の高さを比べた写真です。仙台ではどの高さでしょうか？

ニヌファ星（子ぬ方星）又は、ニーヌバ星と呼ばれ大事にされてきた星だけに、八重山でもそれにまつわる昔話もいくつか存在します。

北斗七星は、そのひしゃくのような形から人目を引いたようで、幼い頃から「ナナツン星」とか「天ヌナナツン星」「ひしゃく星」等という言葉を何度も聞いて育ちました。

七つ星は、北極星を中心に北の空で反時計回りに回っているので、ひしゃくを伏せたような位置に来た時の「柄の部分」の4つの星を結ぶと、船形に見えるので、「舟星」と捉えたのが「フナー星ユンタ」の起原です。

北斗七星の柄の先から数えて2番目の星（ミザール）は、小さな星（アルコル）を従えたような二重星で、街灯りのなかった昔は、今よりもくっきりと見えたに違いありません。その二重星を八重山の先人たちは、「赤ちゃん星を連れた母親」と見なし、「星女房」等の星物語を語り伝えました。

この二重星は、ギリシア時代は兵役検査の際、視力検査に用いられたとのことです。機会があれば、仙台ではどのように見えるのか確認していただきたいですね。

6　宵の明星と明けの明星

私は小さな農家の八人兄妹の五番目として生まれ、下に三人もの妹がいるので夜は祖母と一緒の布団にくるまりました。布団の中で祖母が話してくれる昔話や、歌ってくれる民謡も大好

きでしたが、母を独占できる機会を常に窺っていました。
その一つが、夕方畑に母を迎えに行くことでした。母の帰り道を逆にたどって途中で母に会い、一緒に帰宅するという算段です。母と手をつないで帰る道すがら、夕闇迫る西空低く、ひときわ明るく輝く星を指さして、母は「あれが宵の明星」と教えてくれました。その言葉は、美しい響きと母を独占できる喜びとともに、幼い私の心に深く刻み込まれました。そして、

♪お日様西に隠れて　宵の明星顔出すと　あっちの方でもピカリ　こっちのほうでもピカリ、出てくる出てくる星の数

という歌を母は口ずさんだのです。
母を独占できるもう一つのチャンス、それは早朝でした。
十二人家族の朝食の芋を炊くため母は朝早くから動いていました。その気配を感じると私も飛び起きて母にくっついていました。かまどの前で暖をとりながら、こぼれた灰に木切れで書くひらがなが、文字との出合いでした。外に出ると、白み始めた東天に明るく輝く星を、「あれは明けの明星」と、指さし

♪夜明けに近くなってきて　東の方が白むと　あっちの方でも消えて　こっちのほうでも消えて　明けの明星ただ一つ

という歌詞を母は教えてくれたのです。
宵の明星と明けの明星が同じ星であることも、それが金星という惑星であることも全く知らなかったはずの母が、幼い私にこれだけのことを伝えてくれたことに心から感謝しています。

因みに、八重山では、宵の明星は、「シィカマ星」と呼ばれ、一日の農作業終了、すなわち「シィカマ（ノルマ）」の目安にしたとのことです。「西空に宵の明星が輝き始めたから、そろそろおしまいにしようか・・・」といった具合でしょうか。一方、夕方一番星として輝き始めることから、「夕飯を急かす星」「夕飯を待っている星」ということから、「ユウバンブス」とか「ファイダマブス（食いしん坊の星）」等と称されていたようです。これは沖縄本島も同じで、「ユーバンマンジャー（夕飯を待ってるもの）」と呼ばれています。対する明けの明星は「アカシィキィ星」すなわち「暁の星」と呼ばれています。

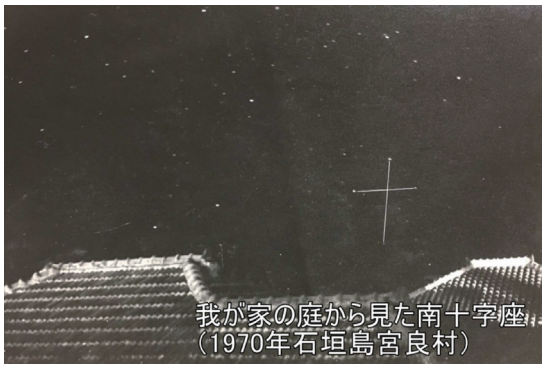
7　南十字星

南の空があれほど開けていながら、「・・・ヤシの葉影に十字星・・・」と歌われている南十字星が石垣島から見えることを知らずに成長し、大学生の頃、見つけ方を教えてもらい探してみると、何と我が家の庭からも見えるではありませんか。その時は、「庭からも見える」という喜びよりも、「どうしてこれまで誰も教えてくれなかったのだろう」という、残念に思う気持ちの方が大きかったことを覚えています。
初任地の波照間島では、夏場、いつも水平線上に輝く南十字星を観て過ごしました。山や川がなく、水に乏しい波照間島では、生活用水を雨水に頼り、どの家庭でも庭にコンクリート製のタンクが設置されていました。星空の広がる晩には、下宿の女の子とタンクの上で星を見ながら語り合ったものでした。不

思議なことに、隣のおじさんは、南十字星の東（左側）に明るく並んだ星《ケンタウルス座のα星とβ星》を「あれが、ハイガ星」と指さし、それにまつわる伝説（四つの乳房を持つ女）まで話してくれたのに、南十字星のことを認識していませんでした。

なぜ、私のまわりの大人たちが、高度が低いとは言え、これほどまでに南十字星に興味を示さなかったのか、今でも疑問が残ります。

小浜島に、「はいむるぶし」というリゾートホテルができた時、「南群（はいむ）る星（ぶし）」は　南十字星の方言名だという人もいましたが、専門家や古老たちはこぞって否定していました。八重山には南十字星に対する方言名は無いと。


我が家の庭から見た南十字座
（1970年石垣島宮良村）

宮古島から見た南十字座

いつの日か、ずっと南の島へ行って、ヤシの葉影に輝く南十字星を見て見たいものです。

8　イローラ星（彗星）

彗星についても貴重な体験をしました。中学生の頃だったと記憶していますが、明け方東の空に、尾を上にして彗星が現われたことがありました。祖母は、「イローラ星が出ている、きっと悪いことが起きるに違いない」と、動揺していましたが、何事も起こらずいつの間にか消えていました。「イローラ」というのは「入り髪（がん）」といって、女性が沖縄カンプーを結う時、自前の髪に加えてボリュームを持たせるために使う人髪の束のことです。彗星の引く長い尾っぽが、その「入り髪」に似ていることから八重山地方では尾を持つ彗星を「イローラほし」と呼んでいるようです。

イローラ（入り髪）

9　星願い

八重山地方では、運気願いの一つとして、時折「星願い（ふぅぃにが）」が行われます。星形に切った金紙を数枚飾り、一番星が上がる頃合いに、酒、花、供物を用意し、星の見える縁側で行われます。私も一度だけ「星願い」をやってもらったことがありますが、「金色の星型」を飾ることと、神女の婆さんの神口（かんふつ）に「子（に）ぬ方星（ふぁぶし）をお招きし、七つ星をお招きし・・・・」と、星が登場すること以外は、通常の運勢願いと何ら変わることはありませんでした。ただ、テープレコーダーで、沖縄の古典音楽「柳」の曲を流しながら、家の周りをまわって清めたことと、使った金色の星型を屋敷の東側の庭に埋めたことが印象に残っています。その後、運気が上昇したかどうかは実感できませんでしたが、現在このように元気で、星の話ができるのは、あの時の「星願い」のおかげかもしれませんね。

10　星物語（里之子と天女の恋物語）

八重山地方には沢山の星ものがたりが存在しますが、中でも有名な「子ぬ方星になった子ども」や「星女房」等は、書物や講演等で触れる機会が多いと思われますので、ここでは、七夕のおりひめ・ひこぼしに関する星ものがたりを紹介したいと思います。

「野底マーペー」で有名な八重山民謡「ちぃんだら節」の一説に、次のような歌詞があります。

♪天からの　引きみょうる　ウヤキ星で　いそかや

《天に輝く星に例をとれば、ウヤキ星（おりひめとひこぼし）という　二星は》

♪並ぶれば　定みようり　行かゆんでどぅ　しぃかりる

（並んでいることが定められている、行き逢うとも聞いている）

♪とぅばらーまとぅ我（ぱ）んとぅや　触れ肌み　行かいみゆな

（あなたと私は　肌身を触れ合うことも、行き逢うこともない）

一七〇〇年代に作られたと言われる「ちぃんだら節」に、「おりひめとひこぼし」が登場することに初めは違和感がありましたが、中国から七夕物語が伝わった後に、その知識のある方によって作られた比較的新しい歌詞であることを考えると納得がいく話です。

仙台の七夕祭りの導入と、どちらが先でしょうか？

これから紹介する「里之子と天女の恋物語」にもおりひめと、ひこぼしが登場しますが、それも、七夕伝説を知る方によって、沖縄の有名な組踊「銘苅子（めかるしー）」を基に、一部創作されたものだと考えられます。

沖縄各地に残る羽衣伝説では、天女であることがばれて昇天していく話や、組踊「銘苅子」のように、天女との間に生まれた子が首里王府の王となり、神格化を狙うもの等、いくつかのパターンがありますが、ここで紹介する「天女の恋物語」は、天女との間に生まれた子が星となるところが異色と言えるので

はないでしょうか。

【里之子と天女の恋物語】

昔、ある村に銘苅里之子という方が住んでおりました。里之子の庭には大きな池があり、そのまわりには天まで届きそうな大木が植わっていました。里之子は、毎日池の周りを散歩することが日課となっていました。

ある日、いつものように池の周りを散歩していると、どこからともなくいい香りがして来たので、香りに誘われて池に近づくと美しい一人の女性が水浴びをしているではありませんか。里之子はとっさに木にかけられている羽衣を隠し、困っている女性を家に招き入れます。夫婦となった二人の間には、女の子と男の子が生まれ、幸せに暮らしていました。

ところがある日のこと、弟をあやしながら歌う姉の子守歌に、天女は驚きました。

〈ヨーイヨーイ、わが按司の飛御衣　わが按司ぬ舞むそ
六股の下に　八股の下に　稲束ぬ下に　粟束の下に
置ち古みしちょん　置ちさらししちょん・・・・

と、歌っているのです。天女は、走って走って蔵の方に行きました。そして、蔵の中を探して、とうとう羽衣を見つけ出したのです。

天女はその羽衣を着ると、里之子に言いました。

「私はもう天に帰らなければなりません。もし、私に会いたくなったら、天から縄を下ろしますのでそれを伝わって天に昇ってきて下さい」

そして、何度も何度も振り返りながら天女は天に昇っていきました。

何日かたったある日、天からスルスルと一本の縄が降りてきました。二人の子どもはたいそう喜んで、父親に知らせ、里之子と二人の子どもはその縄を伝って天に昇っていきました。

天上では、天女の父親である天帝が、怖い顔をして三人を迎えました。天帝は、娘が地上の男と結婚したことをとても怒っていました。

「娘と会うなんてとんでもない。会いたければ冬瓜の種を蒔きなさい。」と言って冬瓜の種を里之子に渡しました。

その時天女が、「種を蒔くときは鎌を持ち馬に乗って蒔きなさい。」と、そっと教えてくれました。不思議に思いながらも言われたとおりにすると、何ということでしょう。蒔いた種からたちまちツルがどんどん延び、馬の足に絡みつき、今にも転びそうになります。里之子は、鎌でツルを切り離しながら逃げたのでようやく助かりました。

冬瓜の種を蒔き終えて天帝の所へ戻ると、天帝は冬瓜の実をとってくるように言いつけます。まだ実っているはずもないのにと思いながら畑に行くとそこにはもう、大きな冬瓜の実ができていました。

一番大きな実を持っていくと、今度は、「その実を横に切りなさい」といい付けました。「あっ、切るのは待って・・・」

と、天女が止める間もなく、里之子は、冬瓜をザックリと二つに切ってしまいました。

するとどうでしょう。冬瓜の中からドドドドドーと水が噴き出し、里之子と子供たちを押し流してしまいました。「お母さーん、お母さーん」子どもたちの呼ぶ声もむなしく、天女と三人の間には、囂々と流れる大きな川ができてしまいました。天女は嘆き悲しみました。向こう岸にいる子供たちに会いたくても、流れの速い川を渡ることはできません。天女は日に日に元気をなくしていきました。

その娘の様子に天帝は、「では、一年に一回だけ会うのを許そう。」と言ってくれました。

天女は、一年に一日だけ、心から愛する里之子と、子供たちに会うことができるようになりました。

今、天の川の向こう岸に光る三ツ星は、里之子と子供たちで、その反対側に光るのは天女の星だということです。

この話は、多良間島の話が伝わったものと考えられますが、全く同じような話が、与論島にも存在します。調査をしたわけではありませんので、分布の範囲は把握しておりません。いずれにせよ、中国から伝わった「七夕物語」と各地にある「羽衣伝説」と組踊「銘苅子（めかるし）」の三つを合わせたような物語であり、それなりの教養と、知識を持ち合わせた方の作であることは容易に想像できます。

天の川を挟んで輝くおりひめ（こと座の一等星ベガ）と、ひこぼし（わし座の一等星アルタイル）を見ると、ひこぼしは左右に小さな星を連れていることが確認できます。このことから考えられることは、話者又は作者は、星座についてもそれなりの知識を持っていたことが想像できますね。

Ⅱ　月

1　子守り歌「月ぬ美しゃ」

月の登場する八重山の歌で広く知られているのは、何といって「月ぬ美しゃ」ではないでしょうか。

♪月ぬ美しゃ　十日三日　美童美しゃ　十七つ

月の美しいのは十三夜の月で、乙女の美しいのは、十七歳ごろであるという意ですが、月は、満ち足りてこれから欠けていく十五夜の満月よりも、その手前の十三夜が美しいと表現し、乙女も全盛期である二十歳ではなく、その手前の十七歳頃が最も美しいと言い切っているのです。

この歌を、これまでに何度聞き、何度歌ってきただろうか？一番好きな子守歌ですが、一番心に残っているのは、歯のない祖母が布団の中で静かに歌ってくれた「月ぬ美しゃ」です。今、あの頃のことを思いつつ、孫に歌ってあげています。

ところで、「月ぬ美しゃ」には次のような句もあります。

♪西から上りおる　若が月まー　我んちゃ家ぬ頂までぃ　上り給ぼり

西から上がってくる若いお若月様（三日月）、我が家の屋根の上まで上がってきて下さいという意なのです。太陽が沈んだ直後の西空低く輝き始めた三日月は、しばらくすると沈んでしまいます。輝いたまま屋根の上まで上がることはありません。ここで、不思議なのが、ほぼ確実な月や星の運行を把握していた先人たちは、本当に三日月が西から上がって来たと認識していたのか、それとも、有り得ないことと知りつつ、表現しただけなのでしょうか？

他にも月に関する歌は沢山ありますが、割愛し、ここでは月にまつわる体験をいくつか紹介したいと思います。

2　生活の中の潮の干満

芋と豆腐は我が家の常食で、母はほぼ毎日といっていいほど石臼を引いて豆腐を作っていました。豆腐作りに欠かせない海水を汲みに行くのは姉と私の役目でした。遊びほうけていると、祖母が昼間の白い月を見上げて、「早くいかないと潮が引いてしまうよ」と促されて潮汲みに行ったものです。今思うと当時の人々は、月の形や動きを、生活の中に取り込んでいたことが分かります。

最後の勤務校となった母校の宮良小学校では、山羊を飼っていました。そのうちの1頭が産気づいた時、私は不安になって従弟や知人に電話をかけまくりました。一番先にかけつけてくれたのはＰＴＡ会長の石垣さんでした。彼も月を見上げたり旧

暦を確認したりして、「今日の満潮は＊＊時なので、夕方になるでしょう」と言って帰られました。彼の言った通り、満潮の時刻に無事、かわいい赤ちゃん山羊が誕生しました。

そう言えば、これまでに何度も身内の者の臨終に立ち会ったが、老人たちは、しきりに「今日の干潮は何時？」と気にしていました。干潮時に何も起こらないと、「次の干潮までは大丈夫だ」と安堵していたものです。科学的根拠があるかどうかは知りませんが、「出産は満潮時に」「引き潮と一緒に逝く」という言い伝えがあります。

Ⅲ　風

1　口笛で風を呼ぶ

(1) 凧揚げ

八重山地方は凧揚げが盛んで、ピキダー（簡易凧）、マッタクー（四角い凧）、ハッカク（八角型の凧）等の固有の伝統凧があります。正月が近づくと、各家庭では男の子たちが竹を削って凧作りを始め、正月の朝には村の空いっぱいに凧が揚がり、唸り声が聞こえてきたものです。

さて、その凧を揚げる際に、無風状態が続くと口笛で風をよび、いい風が来るタイミングを狙います。不思議なことに、独特のリズムと抑揚を持った口笛をふくと本当に風が来るのです。いい風が吹いてきたとき、一人が凧を頭上に持ち、もう一人がタイミングを狙って息を合わせて糸を繰ると、風に乗って凧が揚がるのです。科学的根拠があるかどうかは知りませんが、あのリズムとメロディーで口笛を吹くと本当に風が吹いてくるのです。

(2) 籾の選別

八重山は比較的水が豊富で、幼い頃我が家も米を作っていました。稲の収穫の仕方は、本土と八重山ではかなり違いがあり、稲を刈りとるとその場で脱穀し、袋に入れて持ち帰り、庭に広げた、藁で出来た、ニクブクと呼ばれる敷物の上に広げて干すのです。十分に乾燥されたら、今度は、良い籾と悪い籾を選別して米蔵に入れる訳です。その籾を選別する時、ひしゃく型のペーらと呼ばれる道具に籾を入れ高いところから落としていくと、実の入っていない悪い籾は風でえり分けられていくのです。風が途絶えると、大人たちは口笛で風を呼びました。

このように、目に見えない風を自由に呼び寄せていた大人たちですが、「夜の口笛」をひどく嫌っていました。夜、口笛を吹くと、「マジムン（魔物）」がやってくると注意されたものです。

2　風を讃える古謡「うらふにユンタ」

風に係る古謡として一番先に思い浮かぶのがで、村に伝わる「ウラフニユンタ」です。ウラは「蔵・蔵元」、フニは、「船、公用船」のことです。帆船時代の船旅は大変な難事であり、しかも、島人たちが血のにじむような思いで納めた貢納物をのせて首里城まで届けるのだから、その責任の重さは容易なことではなかったでしょう。沖縄旅の出航は、季節風が南に変わる四

月～五月で、いい風が吹いて無事に那覇に着けるようにとの人々の願いを歌ったのがこの「うらふにユンタ」なのです。

・かじまちどぅ　　順風を待って
　ういまちどぅ　　良き気象を見定めて
　まちおるよ　ほない　　待っているのだ

・んまぬばぬ　　午の方の
　ぴちぃぬぱぬ　　未の方の
　ましょうかじよ　ほない　　真正面から吹く順風だ

・くぬかじや　　この風は
　ただぬかじ　　ただの風では
　あらぬそよ　ほない　　ないのだよ

・ぶわまきゃぬ　　叔母たちの
　ぶなりゃまぬ　　姉妹たちの
　にがいかじよ　ほない　　祈願による南風なのだ

船の出帆に際しては、姉妹（ヲナリ神）、叔母、神女、村の婦女子が斎戒沐浴してこの「うらふにユンタ」を歌って、航海の安全祈願をしたとのことです。

明治三六年に最後の公用船出たという記録が、宮良村の村誌にも記録されています。明治二二年生まれの私の祖父が、「自分たちの若い頃まで人頭税があった」と、話していたことを覚えています。

人頭税廃止の後も、大正末期ごろまでは、出兵する村人を女性たちがこの歌を歌って送り出したと伝え聞いています。

ところで、公用船に乗る船乗りは、各村々から屈強な男たちが選ばれ、それは家族、親類にとっても名誉なことだったようです。ところが、安全祈願をしたとしてもすべての人が無事に帰っては来れませんでした。海の藻屑となったり、中国や台湾、無人島に漂着した例も沢山あったということです。

実際に、私の母方の祖先にも、船乗りに選ばれた人がいて、何年も帰ってこないので死んだものとあきらめて葬式を済ませていたら、十年後にひげを伸ばしたものすごい風貌で帰ってきたものの誰も気づかず、飼っていた犬がしっぽを振って飛びついていき本人だと判明したようです。家族は勿論、本人もたいそう喜び、仏壇に飾られている自分の位牌を腰に差し、モーヤー（カチャーシー）を踊って喜びあったという話は、今でも親類の間で語り草になっています。

3　風のいろいろ

（1）風根（かざに）と台風

確か中学生の頃だったと思う。祖父が「風根が割れた。台風が来るぞ」と言っていた言葉を記憶しています。ところが、当時はそのようなことにあまり関心を持っていなかったので、「風根が割れるとはどういうことなのか」を尋ねることもなく聞き流してしまっていました。「風の根っこ」とは何を意味す

るのだろうか?風が生まれるところという意味なのか、それとも、風の吹く方向のことなのだろうか?だとすると、低気圧のことなのだろうか?今となっては、祖父が何をもって「風根」を判断していたのか確かめる術もありません。

ところが後年、それが、いつか夕焼けの中で見た、放射状に広がる後光のことだということが、紹介されていた新聞記事で分かりました。いわゆる「後光」は、数千メートル～一万メートルも鉛直に発達する積乱雲の影だということです。その発達した積乱雲の影が日没後も、高い空に濃く残るということです。

取り入れ前の田んぼや、茅葺きの家のことを心配して、「風根ぬ割りちゃ、風吹くんどぅ（風根が割れたから台風が来るぞ）」とつぶやいた祖父の心の内が、今なら理解できるのです。

（2）新北風（ミーニシ）

長く暑い沖縄の夏も、寒露を過ぎる頃になると、大陸からの冷たい高気圧の吹き出しが届くようになります。沖縄地方に初めて吹く北寄りの季節風のことを「新北風」と呼んでいます。この新北風に乗って、「サシバ」（タカの一種）が、群れを成してやってきます。寒くなり始めた本土から、暖かい南の島を目指して、沖縄、宮古、八重山の上空を通りフィリピンあたりへ渡っていくのです。幼い頃、運動会練習をする運動場で、南を目指すサシバの群れをよく見かけたものです。サシバが渡る頃、ススキの穂が膨らみ始め、沖縄の短い秋の訪れとなります。

（3）夏至南風（カーチバイ）

梅雨が明けると、八重山地方は、海も空も風も一気に夏色に変わります。気温も高いが晴れた日が続き、さわやかな南風が海の香りを運んでくれます。いよいよ本格的な夏の始まりです。

ところが、そのさわやかなカーチバイが人々を困らせることがあります。二、三年前、南十字星を観るために波照間島へ行く計画を立てました。天気は快晴。降るような星空を期待して、離島ターミナルに行くと、「波照間行き欠航」の張り紙。びっくりして、尋ねると、「カーチバイが強くて船が出せない。」とのこと。二便欠航、三便欠航・・・やっと最終便に乗れて波照間島に着いた時には、もう、夕刻になっていました。カーチバイの威力を知らされた初めての体験でした。

（4）二月風廻り（ニンガジィカザマール）

旧暦の二月（新暦三月）の頃になると、「春の荒れ日」として知られているように、急速な低気圧の発生で、大しけ・大荒れの天気が続く期間があります。その時期を、八重山では「二月風廻り」（ニンガジィカザマール・沖縄本島では、ニンガチカジマーイ）と呼ばれ、島の人々、特に漁師さんたちに恐れられています。

近海で発生した低気圧は、急速に発生し、東に進み関東沖合

まで進むこともあります。通過した後には強い北寄りの季節風が吹きこみ、近海は台風並みの大しけとなります。昔から、この時期に小型の船が転覆したりして、急な風まわりと季節外れの北風に、漁師さんたちは悩まされ、用心してきました。

この時期は、海岸には青々としたアーサ（アオサ・ヒトエグサ）が萌える時期なので、小学生の頃はかごを持って浜におり、アーサ取りに熱中したものです。潮の引いた岩礁の上にへばりついたアーサを取るので、沖に出ることはありませんでしたが、急な風雨に追われて帰宅した経験は何度もありました。

また、高校時代に春休みを利用して、友人と離島に遊びに行く計画を立てたら、「この時期には船に乗るもんじゃない」と、祖母にひどく叱られたことがあります。因みにこの時期に発生する低気圧を、昔は「台湾坊主」と呼んでいましたが、台湾に対する失礼な呼び名だとして、この頃では使われなくなりました。

また、島の漁師たちにとって、安心して漁に出るためにも、「二月風廻り」の終了時期を見極めることが大事なこととされていました。その知らせをしてくれるのが、「アンパルヌミダガーマ」という民謡に登場する「ツノメガニ」です。ツノメガニが波打ち際で、一斉に穴を開いたら、「二月風廻り」が通り過ぎたと判断したようです。

おわりに

学問的裏付けのない六十余年のつたない経験をいくつか紹介してまいりましたが、私的でローカルな話題に終始し、分かりづらい点も多々あったかと思いますが、ご容赦下さい。

おもと岳や宮良川に代表される八重山の豊かな自然と、そこに貧乏で子沢山の家庭での生活経験は、時には教壇実践に役立ち、時には子育て・孫守りに活かされてきたような気がいたします。

今回、このような貴重な機会を頂きましたことに感謝いたします。

これからも私は、孫を背に負ぶって「月ぬ美しゃ」を歌い続けることでしょう。